

とんと昔。あつたことだか、なかつたことだか、わかんねけんど、とんと昔、あつたこととして聞かねばなんねえぞ。

とんと昔、あつたけど。この小国おぐにに、築掛やなかけ八右衛門はちえもんという人がいました。魚を取ったり、牛方うしかたをしたりする人で、牛を、二、三頭飼っていました。

ある年の、五月の節句せつくのこと、八右衛門は、川で牛を洗っていました。すると、大山おおやまのほうから、大きな鷲わしが降りてきて、牛を一頭ひつつかんで飛んで行ってしまいました。

「こんちくしょう！」とさけんでも、どうにもなりません。八右衛門は、腹が立って、なんとかして仕返しをしてやろうと思いました。

「鷲のやつめ、味をしめてまた来るにちがいない」

八右衛門は、川岸で、くまの皮をかぶって牛のようにうづくまっていました。すると、あんのじよう、鷲がばほつと飛んできて、八右衛門を牛と間違えてつかまえました。八右衛門は、さらわれた牛がまだ生きているかもしれないと思って、

「どこへ連れて行くんだらう。ひとつ、行くところまで行ってやろう」と、つかまえられたまま、わしに連れられていきました。

大きい山を越え、野原を越え、広い海を越えて、ある島の端にある岩に着きました。そこに、八畳敷はちじょうじきほどの大きな鷲の巣があつて、ひな鳥たちが、ぴいぴいと、大きな口を開あけて餌えさを待っていました。

「こいつらの餌になんかなるものか」

八右衛門は、単に落とされるやいなや、親鷲なつに鉋なで切りつけ、ひな鳥たちも巣から放り出してしまいました。あたりを探すと、さらわれた牛は、骨ばかりになっていました。

八右衛門は、岩の端につつ立って、

「さて、どうやって村に帰ろうか」と、とほうに暮れました。はるかな海を眺ながめっていると、大きな魚が、ざわざわとたくさん泳およいでいるのが見えました。

「あの魚の背中に乗せてもらえたらいいんだが」と、八右衛門がひとりごとをいっていると、いっぴきの魚が近づいてきて、

「おまえ、何の悪いことをして、こんな佐渡島さどがしままで流されてきたんだ」とききました。八右衛門は、

「ここは、佐渡島なのか。いや、大鷲にさらわれて、こんな所まで来てしまったんだ。帰る方法がなくて困っているところだ。おまえさんに乗せて行ってもらえたらと、思案しあんしていたところだ」

と答えました。

「そうか。それなら、おらの親方にたのんでみる。親方は、鮭さけの大助おおすけといって、毎年十月になると最上川もがみがわを上つていく。十月まで待つて、またこの岩の上に来て、『鮭の大助どのお』つてよぶといい」と教えてくれました。八右衛門は、

「これはありがたい。いいことを聞いた。十月まで待つて、鮭の大助どのに乗せてもらつて帰ろう」と思つて、佐渡島で、十月まで暮らしました。

とんと昔は、月日のたつのは早いもの。そろそろ秋風が吹いて、十月の声を聞くようになりました。八右衛門は、毎日、岩の上に来て、

「鮭の大助どの。鮭の大助どの」とさげんでいました。

すると、十月二十日の恵比寿講えびすこうの日、沖おきのほうから、ごわごわと大波立てて、馬みたいに大きな鮭が泳いできました。そして、

「だれだ。おれを呼んでいるのは」といいました。八右衛門は、

「鮭の大助どの、おれは、築掛け八右衛門というのだが、大鷲にさらわれて、この島に来てしまった。帰りたいんだが、鳥のように飛ぶ羽もなく、魚のように泳ぐひれもない。それで困り果てているんだ。どうか、どうか、最上の小国まで、おまえの背中に乗せてつてもらえまいか」とたのみました。

鮭の大助は、獅子ししのような大きな口を開けて、

「おまえが、築掛け八右衛門か。いつもおれたち魚を、築で取つてしまう憎いやつだ。きょうこそ、ひと口に飲みこんでやる」とどなりました。八右衛門は、飲みこまれてはたまらないと、

「鮭の大助どの。おまえの怒りはもつともだけれど、おれは、春に鷲にさらわれてからというもの、魚取りをやめたんだ。これからもいつさい、築掛けなどしないから、どうか助けてもらいたい」と、拝むようにしてたのみました。

鮭の大助は、これを聞くと、

「その約束を守るといふなら、助けてやろう。さあ、おれの背中に乗れ。小国のどこまで乗せて行こうか」といいました。

「小国ならどこでもいい」

こうして、佐渡島を朝に立つて、酒田さかたの港に入り、酒田から最上川に入って、小国川を上つていきました。鮭の大助は、

「鮭の大助、いま、のぼる。鮭の大助、いま、のぼる」とさげびながら、泳いでいきました。

村では、恵比寿講の晩にこの鮭の大助の声を聞くと、よくないことが起こるといわれていました。それで、村人たちは、声が聞こえないように、餅つきなどして、大声を出して騒いでいまし

た。そこへ、八右衛門が、ひよこつと帰ってきたものだから、みんな、びっくりしました。

「ありやりや。死んでしまったかと思っていたよ。よかった、よかった」

そののち、八右衛門は、築掛けをやめました。村の人たちも、鮭の大助ののぼる日には、魚が逃げられるように、築のもう片方の入り口も開けておくようになったということです。

どんびん、かえんこ、すつかえこ

村上郁再話

資料『羽前小国昔話集』佐藤義則／岩崎美術社